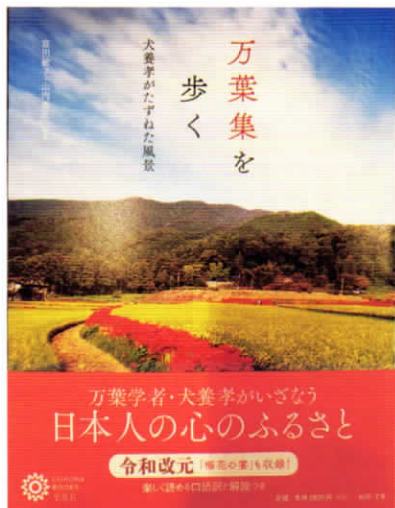


初恋を思うべし

南都明日香ふれあいセンター 犬養万葉記念館

NO.10 (2020年2月1日号)

新年あけましておめでとうございます。みなさまも初春令月、気淑風和の穏やかなお正月をお迎えになったことと思います。



「令和」という新元号のおかげで、犬養万葉記念館もにわかに注目を浴び、以来内外共に、活気ある「時」を過ごしました。

犬養先生と新天皇のご縁は前号でご紹介した通りですが、一連の皇位継承に関わる様々な行事は興味深く、第40代天武天皇の時に初めて大嘗祭と新嘗祭とが区別され、以来「大嘗祭」は一世に一度行われる大変重要な皇位継承儀式となりました。そして今もなお続く皇室の伝統はまさに歴史絵巻を身近に体験できたような貴重な機会であり、天皇家と『万葉集』の世界とが重なった瞬間ではなかったでしょうか。さて、今春には開館20周年と新元号「令和」を祝し、特別展示「令和に生きる犬養万葉～『万葉の旅』から56年～」を予定しております。また、秋には昨年で終了いたしました「万葉の歌音楽祭」の特別企画も計画しております。記念館もまたあらたなスタートを切るべく明日香村、記念館施設、そして犬養万葉により親しんで頂けますように務めていきたいと思っております。

記念館では平凡社の『万葉の旅』(全3巻)を販売中ですが、令和改元に伴いなんと9月末に新たにコロナブックスより～犬養孝が訪ねた風景『万葉集を歩く』が刊行されました。「犬養万葉」が再び光を放ち始めたことに喜びを隠しきれません。1,800円+税で全国書店でも発売中です。

記念館歳時記



ささやかな館庭ですが、今年も新たな万葉植物が育ちました。「いちし(彼岸花)、忘れ草(やぶかんぞう)」です。これからも万葉の植物にこだわって、ご紹介して参ります！



開館当時からはじめた万葉植物野外講座が、9月に第50回を迎えました。長きにわたって協力して頂いた馬場吉久講師には心から感謝申し上げ、朗唱を交えた楽しい講座は、多くのファンの方々にも支えて頂きました。次回は3月22日(日)です。



第17回万葉の歌音楽祭が盛会のうちに最終回を終えました。大変レベルの高い作品の中でも治郎丸智希さんと劉偉さんの「遣唐使ものがたり」が大賞を受賞されました。



2年ぶりに開催された展示は「飛鳥アートヴィレッジ2019回遊」で、徳本萌子さんの展示会場となりました。記念館の名物である「さるすべり」の葉もアートになりました。

犬養先生の碑



昨春、記念館玄関前の、犬養先生の思いが言葉となったシンボル碑の碑面が、うかし彫りから石面に彫り直され、20年ぶりにリニューアルしました。

万葉風土文芸学を提唱し、飛鳥保存問題に尽力された犬養孝先生が最も頼りとしていたのは、清原和義先生だった。清原先生は犬養先生の学統を継承し、新たに展開させていくことを使命としていた。

最初の著書『万葉のふるさと』（ポプラ社、1973）は、小学校の高学年生にも理解できるように平易な文章で書かれていた。格好の万葉入門書であった。犬養先生は「おわりに」と題した跋文で、この本は「はじめに、万葉の昔と今と、民俗や習慣のちがうところをあきらかにして、ついで、万葉の四季のおりおりの歌ごころを説き、万葉時代のすぐれた歌人たちの美の世界から、東国の名もない庶民たちのあいだの真情のかがやきをたずね、おわりに、万葉の歌のいちばん多い大和（いまの奈良県）にみなさんをつれて行って、わたくしたちの心のふるさとを、実地についてさぐってゆこうという仕組みです。」と述べている。これには「清原万葉」の原点が凝縮されており、後に数多くの論考に結実していった感がある。表紙には、犬養先生揮毫の甘樫丘万葉歌碑の写真が大写しで用いられていた。

犬養先生は出来上がったばかりの跋文を、たまたま居合わせた私に読み聞かせた。そして清原先生を紹介する文中の言葉として、「すぐれた学者」「立派な学者」「偉い学者」の3案のうち、どれが良いか私に尋ねた。「断然第1案です。」と答えたので、「すぐれた学者」案が採用された。出版記念会は西宮市今津山中町の犬養邸のダイニングキッチンでささやかに行ない、大阪大学万葉旅行の会の現役委員と数名のO.B.委員がお祝いとして万年筆を贈呈した。

その後、犬養先生は清原先生の著書に2度も序文を書いている。『萬葉の花と西宮』（西宮市都市整備公社、1991）は西宮市の「西田公園万葉植物苑」のガイドブックであるが、本格的な万葉植物の解説書となっている。この植物苑開設に際し、犬養先生は西宮市から相談を受けガイドブックの執筆を頼まれた。万葉風土理解のためには万葉植物の知識も大事なので、清原先生のこれからの研究活動にとって望ましいと考え、執筆を任された。「万葉植物の先行解説書には、いい加減なものが如何に多いかよく分かった。大変勉強になった。」と、清原先生は語っていた。

もう一冊は、先生の学位論文集である『萬葉集の風土的研究』（塙書房、1996）である。この本には、大伴家持・

高橋虫麻呂を主に、奈良朝諸歌人、防人・遣新羅使人など集団歌人に関する計26本の風土論考が収録されている。巻末には万葉地図を付している。序のなかで、犬養先生は次のように述べている。「著者清原和義君は、日本人の中でも、もっともよく歩いている。歩いて体験している人だ。万葉の故地を歩く上で、この人ほど徹した人は稀であろう。風の音、野のそよぎ、潮騒の音までも聞き出さねばならぬ。著者を凌ぐものはいないだろう。」清原先生曰く、「犬養先生を凌ぐものはいないだろう。まだまだ歩きが足りないと言われているんだよ。」

清原先生は「飛鳥古京を守る会」の委員や「万葉の大和路を歩く会」の講師、その他様々な市民講座の講師などを引き受け、多忙さは増すばかりだった。「No.と言えない私」と笑っていた。

「飛鳥古京を守る会」の機関誌『あすか古京』には、2編の随想が寄稿されている。第46号（1988.2.1）には「豊国の香春—万葉故地探訪（一）—」、第47号（1989.2.1）には「陸奥・浅積香山—万葉故地探訪（二）—」。飛鳥・大和から出発して全国の万葉故地へと、歌人たちの万葉風土世界の多様な広がりを意識し、随想も書いていると、自分自身に言い聞かせるように話していたことを思い出す。

私は清原先生が遺された著作目録の作成に少しずつ取り組んでいるが、全体像はまだ見えてこない。犬養先生の著作目録作成にもずいぶん時間が掛かったが、その結果、記念刊萬葉とともに『シリーズ（大著3冊とブックレット3冊）』として、単行本未収録の全著作を収録して書籍にまとめることができた。清原先生の著作目録が完成すれば、生前最後の単著である『万葉空間』（世界思想社、1997）の続編に繋がるのではないかと、心密かに思っている。

編集後記

- ★初恋通信の発行が大幅に遅れてしまいました。しかし令和元年年末の日に掲載された朝日新聞夕刊の犬養先生のスクープ記事はあらためてレジェンドの万葉学者犬養孝先生の存在が世の中に示され、「令和」という新御代が『万葉集』ばかりでなく、犬養先生にも光が注がれたことの感慨を思わずにはいられませんでした。
- ★犬養先生の後継者として期待されていながら、早逝された清原和義先生。記念館には清原先生の書物や万葉関係品も多く寄贈されています。23回忌の6月に、記念館で武庫川女子大学の教え子や万葉風土研究会の方々と共に「清原先生を偲ぶ会」を共催いたしました。時の早さと、令和万葉のこのタイミングに悲喜思いの深まるひとときでした。
- ★岡本館長も、元号発表後たいへん忙しくなりました。『万葉集』の講演依頼をはじめ、各自治体が「万葉ブーム」を意識したイベント作りや、故地発信のご相談などがあり、「令和」をきっかけに観光行政に対する真剣な姿勢を実感します。犬養万葉記念館からは「犬養万葉」の楽しさ、素晴らしさを大いに伝えていきたいと思っております。

これからの予定

3月26日（木）～6月2日（火）犬養孝令和記念特別展示
4月5日（日）第21回若菜祭及び神事 講演：猪熊兼勝氏
9月12日（土）万葉の歌フェスティバル

★毎月開催：岡本館長万葉講座・みんなで歌おう童謡唱歌

※詳細については記念館にお問い合わせください。



発行者：南都明日香ふれあいセンター 犬養万葉記念館
〒634-0111 奈良県高市郡明日香村岡1150 tel:0744-54-9300 fax:0744-54-4200
Eメール: info@inukai.nara.jp ウェブサイト: http://inukai.nara.jp
発行責任者：岡本三千代（館長）